

特集

百年の夢、その先へ。



2011年は、中国の辛亥革命から100年目の年に当たる。辛亥革命とは、西欧列強による半植民地支配や日清戦争によって弱体化した中国の清朝専制政権を、1911年に孫文が武装蜂起によりついに打倒し、中国の民主化への確かな道筋を作った革命である。孫文の回りには当時、その思想と人格に共感し、革命成就に助力

した日本人が多く存在した。中でも宮崎兄弟の末弟・滔天は孫文を献身的に支え、孫文と固い友情で結ばれていた。荒尾に生まれ育ち、孫文とともに日本と中国から世界の平和を築くことを夢見た宮崎滔天とその兄弟。彼らが見た壮大な夢と深い絆という名の財産は、今なお荒尾に、確かに息づいている。

孫文が2度訪れた荒尾

本年2月13日、荒尾市から香港孫中山記念館に、一葉の写真パネルを贈呈した。パネルの写真は、1913（大正2）年、孫文が国賓として来日した際、荒尾の宮崎家（現・宮崎兄弟生家）を訪れた際に撮影された写真である。

孫文ははるばる荒尾の地を訪れ、辛亥革命支援への感謝の意を滔天と家族に伝えた。

今も生家の庭にある梅の木の前で、孫文と宮崎滔天、宮崎家の人々や地域住民と写されたこの写真は、孫文と宮崎家との確かな絆を伝える貴重なものである。

孫文は、1895年に広州で起こした初の挙兵に失敗し、アメリカやイギリスを経由して日本を訪れた1897（明治30）年、滔天の招きで2週間程荒尾の宮崎家に滞在した。

今日、宮崎兄弟生家を訪れる中国人は、宮崎兄弟の業績とともに、孫文が過ごした家が当時のまま保存されていること、写真の背景世襲郷土として玉名郡内の諸役を務めた家柄であった。兄弟の父・長蔵は9代目に当たり、時代に先駆けた平等主義の持ち主であった。長蔵の教えを受けた兄弟は、全員が志士となり、社会変革に向けて人生を捧げた。

長兄・八郎は熊本の自由民権運動の急先鋒と目されながらも、西南戦争で戦死した。長兄の死は弟たちに多大な影響を与え、志半ばで散った八郎の精神は三人の弟たちに引き継がれた。八郎亡き後宮崎家を継いだ一兄・民蔵は、土地の均等所有論を説く活動を続けながら、中国革命を助力した。

二兄・彌蔵は、日本での自由民権運動の行き詰まりを打破する先を中国革命に見出し、中国革命から日本やアジアの平和を模索する革命論を滔天に引き継いだ。そして病に倒れた彌蔵の遺志を継ぎ、中国革命を指導する孫文を献身的に支援したのが、末弟・滔天である。宮崎家に脈々と息づいた思想と意思は、辛亥革命が成就する重要な力ギとなったのである。

宮崎兄弟と革命の時代

となった梅の木が、今も健やかに枝を伸ばしていることに感銘を受けるという。宮崎兄弟生家は訪れる中国人に、兄弟の思いと無欲に孫文を支え続けた事実、そして孫文との厚い友情を強く印象付ける貴重な場所となっている。

革命の時代

宮崎兄弟と孫文が生きた19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本はおよそ300年続いた江戸幕府が倒れ、明治維新とともに西欧的な近代国家へ変貌を遂げつつあった時代である。

一方中国は、およそ270年続いた清朝専制政権の末期にあった。特に1840年にもアヘン戦争以降、西欧列強による半植民地支配の重圧は民衆に転嫁され、疲弊にあえいでいた。既に国政や思想の大きな変革なしに中国の民衆を救う手は見出すことができなかつた。一足早く明治維新によって封建体制を解体した日本

革命志士としての素地

は、中国にとって一つの模範と映った。当時、革命の道を模索するために日本を訪れていた中国人留学生は、日露戦争直後は約一万人にも上り、地理的にも近い日本は、中国革命の拠点の一つとなっていた。

革命志士としての素地

長兄・八郎、一兄・民蔵、二兄・彌蔵、末弟・滔天、4人の宮崎兄弟と辛亥革命の関わりは、直接的には末弟・滔天に集約される。

しかし滔天の業績を振り返るとき、宮崎家が代々受け継いだ郷土としての自負と家風が着実に継承され、そこで形成された自由民権の思想が兄から弟たちへと引き継がれたことが分かる。

それらが結実し、結果的に辛亥革命の成就に結びつく活動につながっていった。

宮崎家は、初代・正之が1647（正保4）年に荒尾に定住したことから始まり、その後肥後藩から郷土に任じられ、8代・正明まで、



1.1913（大正2）年3月に撮影された、孫文訪問時の写真。中央左が孫文、右が滔天。  
2.2月13日、香港孫中山記念館に写真パネルが寄贈された。

——右の写真を撮影した同日、17年ぶりに荒尾を訪れた孫文は、宮崎兄弟との友情をこのように語った。

「17年ぶりに予は荒尾村に來り、尚記憶に存せる風物に接して歡喜に耐えず、宮崎寅蔵（滔天）君並びに其亡彌蔵君とは、予は深き親交あり、そして、兩君は我國のために大いに尽力せられたる人にして、兩君と予のごとき交誼を日華兩國國民が維持するを得ば、千萬年の後までも兩國國家の提携融和を圖るを得べし、又、兩國將來の發展と幸福とを表示すべしと信ず。正義人道を重んじ、隣國の爲にまでも尽力せらるる宮崎君のごとき義士を出せる荒尾村に対し、また、同村民に対して予は深く感謝するものなり、ここに謹んで平岡町長その他諸君に対して敬意を表す」（当時の「熊本日日新聞（現社名）」より）



宮崎八郎  
(1851-1877)



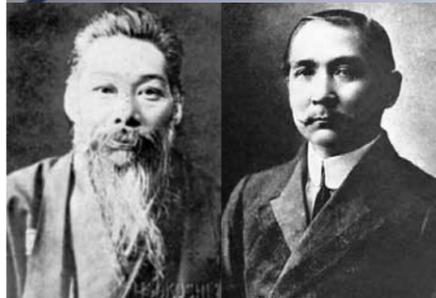
宮崎民蔵  
(1865-1928)



宮崎彌蔵  
(1867-1896)



2



宮崎滔天  
(1871-1922)

孫文  
(1866-1925)

1 宮崎兄弟生家の内部を西側土間から東に望む。

2 1897(明治30)年の1度目の孫文来訪の時に、滔天と孫文が交わした筆談の場面が生家内に設えられている。同席している女性は、当時宮崎家の主であった民蔵の妻・ミイ。2人は通訳がいるとき以外は、漢文による筆談か簡単な英語で会話をしていたという。



1

## 志士が集った「夢」

### 中国から日本、アジアへ

日本人でありながら、滔天が中国革命に傾倒することになったのは、二兄・彌蔵が模索し確立した革命論によるものである。

自分自身について、著書『三十三年の夢』の中で「先天的自由民権家」と称していることから、兄たちから受けた影響の濃さを知ることができる滔天だが、中でも兄弟で最も思慮深かったといわれる彌蔵の存在は、滔天にとって「活動の源泉」でもあった。

時は既に、日本国内での自由民権運動の衰退期であった。目指した革命は行き詰まり、明治国家の確立と、政府による言論の弾圧により衰退しつつあった。

八郎が命がけでなそうとした革命―日本ではその機会も勢いも失われつつあると感じた彌蔵は、その拠点として西欧列強の支配と封建政治に苦しむ中国に見出した。ちょうど日本がアジアに

対してどのような進路を取っていくか迫られていた時代である。帝国主義的色彩を強めていく日本政府とは対照的に、彌蔵は革命的アジア論を展開し、中国を革命し民権国家とすることでいずれ日本を革命し、ひいてはアジアの連帯につなげようと考えたのである。

それが、彌蔵の革命論であり、滔天を突き動かす源泉となったのである。

彌蔵は志半ばで病没するが、その遺志は滔天に着実に引き継がれた。その後、滔天は孫文と出会い、辛亥革命の成就へと繋がっていくのである。

### 『三十三年の夢』

孫文を支援した滔天が、革命成就までの道のりの中で成した大きな業績のひとつに、『三十三年の夢』の執筆が挙げられる。

滔天が孫文と出会ったのは、1897(明治30)年、孫文にとって最初の武装蜂起である広州起義が失敗し

た2年後、孫文亡命中の時のことである。孫文の思想に強く共感した滔天は孫文の中国革命を支援していくが、革命成就の道のりは険しいものだった。

1900(明治33)年に計画した惠州蜂起は、滔天が責任者となっていた武器の調達に絡んで仲間の背信行為が発覚。これが原因で惠州蜂起は失敗に終わったが、滔天も同志内から背信の嫌疑をかけられるなど失意のうちに一時革命運動から身を引き、1902(明治35)年4月に滔天は浪曲師となった。

その年、滔天が「二六新聞」に連載したものを刊行したのが『三十三年の夢』である。滔天の生い立ちから浪曲師になるまでの半生を綴ったもので、計123回を数えた連載終了後、8月に単行本として刊行された。

12月までに第8版に及んだ当時の大ベストセラーとなったこの『三十三年の夢』は、日本国内のみならず、中国にも影響を与えることになった。

『三十三年の夢』は刊行さ

れた翌1903(明治36)年、上海で二種類の漢訳本が刊行された。これらは、当時無名であった革命家・孫文を中国国内や留学生に広く知らしめた。更には日本人志士である滔天の名も広めることになった。

これがきっかけで、増えつつあった中国からの留学生が、滔天の家を訪れるようになる。その留学生の中に、黄興がいた。

黄興は革命組織「華興会」を結成し、1903年に長沙において蜂起を図ったが失敗し、日本に亡命していたのである。滔天の親友となる黄興の「華興会」と、章炳麟らの「光復会」(後離脱)、そして孫文の「興中会」の3組織合同による統一革命組織「中国同盟会」が樹立する。

中国同盟会は、その後の中国革命の指導的役割を担うことになるが、この三派の大同団結に大きな役割を果たしたのが滔天である。

そして滔天が駆け抜けた半生のかたち『三十三年の夢』に、志ある人々が集った結果と言えるだろう。

# 夢の続きを、ともに紡ぐ

荒尾での日中友好の懸け橋の拠点、宮崎兄弟生家施設。  
孫文を支援した代表的日本人である宮崎滔天とその兄弟の業績は、中国ではまだよく知られていない側面も多い。  
しかし辛亥革命 100 周年を機に、中国からの訪問者が増えつつある。そこで、4 月から生家で活躍している 2 人の中国人スタッフ 2 人に、荒尾と宮崎兄弟、そして宮崎兄弟生家に宿っている日中友好に資する可能性について話を聞いた。



牡丹茶会

生家と菩提樹

庭から見る生家



## 史 青秀

Shi qing xiu

史さんが宮崎兄弟生家施設で働くようになったきっかけは、前嶋さんに昨年の絵画資料展のボランティアスタッフに誘われたことだ。生家には、日本に来てすぐに訪れたことがあった。「荒尾に来るまで、宮崎兄弟と孫文の関係は知りませんでした。ここに住むことになって、すごい縁があるなと感じました」

史さんは宮崎兄弟が孫文の恩人だと知り、中国で学んだ日本のイメージが大きく変わったという。そして、「ここで働くことができるなんて、夢にも思いませんでした。本当にうれしい」と

史 青秀 ● し ちんしゅう  
1978 年生まれ、岱洋西在住。河南省安陽県出身。2005 年 8 月来日。4 月から宮崎兄弟生家施設の臨時職員。荒尾市観光振興計画策定委員会市民委員も務め、観光面でも生家施設を生かしたいと奮闘中。

満面の笑顔で話してくれた。「中国人は、滔天たちが一生懸命孫文を助けたことにとっても感動します。ここに中国人のスタッフがいることについても、この施設が大切にされていると感じるようです」と手ごたえを感じている。だからこそ「もっと勉強して資格を取得して、本物のプロになりたいですね」と意気込みを語る。

そして「生家を利用して日中の子どもたちの交流を支援したりすれば、次世代から日中友好を深めていけるのではないのでしょうか」と、生家の持つ可能性についても大きく夢を馳せている。

Maejima jin mei

## 前嶋 錦妹



昨年 11 月に行われた「辛亥革命 100 周年直前企画―孫文と宮崎滔天―絵画資料展」に、ボランティアスタッフとして携わった前嶋さん。中国に関係する仕事を探して「社会教育課に、中国に関する仕事はないか直接電話しました」と語る行動的な女性だ。これが縁となり、現在宮崎兄弟生家で臨時職員を勤めている。

「荒尾は自然が豊かで、静か。空気もきれいで、とても住みやすい」と、中国屈指の大都市・上海市出身の前嶋さんは話す。

生家を訪れる中国人は「170 年前の古い建物が残って

いることと、孫文が来た場所を大切にしていることに喜んでいきますし、日本の精神的豊かさも感じています」と話し、生家をもつ空気そのものが、伝える力を持っていると話す。孫文と宮崎兄弟の交流の歴史を、本や写真ではなく「本物」を紹介して伝えられることが素晴らしいと感じているのだ。

また、「失敗を繰り返さないために歴史を学ぶのですから、もっと手助けがしたいです。生家が 170 年守られ続けたという流れは、荒尾が日中友好を手助けする力になると思います」とも語ってくれた。

前嶋 錦妹 ● まえじま ちんめい  
1969 年生まれ、向一部在住。上海市出身。2000 年 9 月に来日。4 月から宮崎兄弟生家施設の臨時職員。中国について、もっと歴史や現状について幅広く学んで、伝えていきたいと意欲を語る。



1月23日(日)  
中国 CCTV (中国中央電視台) による取材  
今秋、10 回シリーズで放映予定の特別番組「辛亥革命 100 周年」の収録。

2月18日(金)  
香港のメディアによる取材  
辛亥革命 100 周年記念特別番組の収録。

6月30日(木)  
中国福岡総領事の武樹民さんほか、総領事館による視察  
総領事館、航空会社、旅行社など 27 人が訪れ、市長を表敬訪問したほか、宮崎兄弟資料館以外にも市内梨園などを視察。



7月22日(金)  
中国・放遊衛星チャネル「小玉大世界」からの取材  
県観光課とのタイアップ企画で熊本の魅力を取材・放映。

7月31日(日)  
香港中華総商會会長のジョナサン・チヨイさんはじめ香港財界訪日団による視察



9月25日(木)  
日中青少年書画展訪日団による視察見学  
九州・日中間文化交流会主催による書画作品展に伴う中国の小・中学生など 10 人による視察。



# 温故知新一新たに知る、改めて知る

**主催事業**

## 辛亥革命 100 周年記念シンポジウム

～" 千万年 " 光かがやく日中友好を目指して～

- 日時 10月22日(土) 午後1時30分～
- 場所 文化センター大ホール
- 内容(時間)

【第一部】記念式典(午後1時30分～2時)  
 【第二部】パネルディスカッション  
 コーディネーター／松下純一郎さん(熊本日日新聞社編集局長)  
 パネリスト／安井三吉さん(孫文記念館館長)  
 久保田文次さん(日本女子大学名誉教授)  
 谷口功さん(熊本大学学長)  
 蒲島郁夫 熊本県知事

【第三部】講談「滔天と妻・ツチの物語」 神田紅さん  
 ※プログラムの間に辛亥革命100周年記念メッセージ・俳句コンクールの最優秀賞受賞作品発表も予定。

📍政策企画課 ☎63-12734



中国南京市の、南京中国近代史遺址博物館(辛亥革命後に孫文が臨時大總統として執務を行った建物。総統府)にある「赤誠友誼」(偽りのない友情の意味)の像。中央が孫文、右が宮崎滔天。

**主催事業**

宮崎兄弟資料館特別企画展

## 宮崎家と革命の志士たち 未公開史料展

地元や周辺地域の皆さんから提供いただいた、辛亥革命の中心人物である孫文や黄興の書をはじめ、宮崎兄弟資料館所蔵の未公開史料などを展示。

- 期間 10月1日(土)～30日(日)
- 場所 宮崎兄弟資料館2階

[月曜休館、ただし10日(月・祝)は開館し、翌日休館]  
 ●入館料 小中学生100円、一般(高校生以上)210円  
 ※団体(20人以上)は2割引。

📍宮崎兄弟資料館 ☎63-2535



**参考文献(順不同)** ●岡村じゅん 他「夢翔ける—宮崎兄弟の世界へ—」(荒尾市宮崎兄弟資料館)1995年3月/渡辺京二「評伝 宮崎滔天(新版)」(書肆心水)2006年3月/宮崎龍介・小野川秀美 編「宮崎滔天全集 第1巻」1971年7月/※田所竹彦「真筆に見る日中の絆 浪人と革命家—宮崎滔天・孫文たちの日々—」(里文出版)2002年7月/田所竹彦「孫文 百年先を見た男」(新人物往来社)2011年5月/近藤秀樹 責任編集「日本の名著45 宮崎滔天 北一輝」(中央公論社)1982年10月  
 ※を除き、全て市立図書館所蔵  
**その他** ●宮崎兄弟・孫文の写真は、全て荒尾市教育委員会社会教育課提供

たいと思いを表した。それが荒尾を17年ぶりに訪問した際に残した言葉である。

この孫文の謝辞が、宮崎滔天と兄弟、宮崎家だけでなく、荒尾に住む住民にも向けられていることに、深く注意を払いたい。

孫文が夢見たような日中関係の構築は、この100年で見ることはできなかったかもしれない。しかしこれから来る次の100年を見据えて、この夢を現実のものに近づけるだけの素地は、宮崎兄弟を育んだ荒尾の地に確かに存在している。

百年の夢のその先に光を紡ぐ手はきっと、荒尾に住む私たちの中にある。

# 宮崎兄弟と孫文

辛亥革命 100 周年記念イベント Pick Up  
 ～" 千万年 " 光かがやく真の友情～

**提携事業**

創作ステージ ふるさと詩集 vol.3

## 「宮崎滔天と孫文 ～荒尾の偉人をたずねて～」

「滔天と孫文」をテーマに、市民の皆さんと団体、出演者・スタッフ総勢およそ200人で作り上げる創作ステージ。市民の手による「創作ステージ」は今年で3回目。第3弾は辛亥革命100周年を記念して、宮崎滔天と孫文の友情の物語だ。

多くの市民が参加するこのステージは、荒尾が輩出した誇るべき偉人を、荒尾市民自らが演じ表現する貴重な機会。宮崎滔天と孫文の友情を感じながら、演じる人と観る人、荒尾の人と人のつながりを体感できるステージになりそうだ。

- 日時 10月10日(月・祝) 午後1時30分開場、2時開演
- 場所 文化センター大ホール
- 料金 前売 一般1,000円、高校生以下500円(当日はどちらも200円増)

チケットはプレイガイドでお求めください。

- プレイガイド 文化センター、市役所総合窓口、中央公民館、大牟田文化会館、ながす未来館、玉名市民会館、ゆめタウンあらおサービスカウンター、ゆめタウン大牟田サービスカウンター ほか

📍文化センター ☎66-4111



宮崎滔天 役  
**原えいじ さん**

滔天とはどこか似ているところがあるんじゃないか、と想像しながら演じています。史実とはまた違った魅力が出せたらと思います。今は劇中で歌う浪曲の勉強に奮闘中です。演劇を通じて、中国にも発信していきたいですね。



孫文 役  
**那須大誠 さん**

役選出会議で、皆さんに推薦されて孫文を演じることになりました。演劇は幼稚園の時からですから、台詞が少なめでホッとしています。歴史的大役なので、恥ずかしくない演技と、笑顔を絶やさないと心をかけて演じます。



1 衣装をつけての練習は、普段より自然と熱がこもる。若さあふれる演技に期待。  
 2 脚絆や旗など、出演者が多くと小道具もたくさん必要。制作が急ピッチで進んでいた。

辛亥革命が日本やアジア、ひいては世界を平和にするという卓越した視野と志を共有した孫文と滔天の固い友情は、辛亥革命という歴史的大革命の成就に結び付く。孫文はこの固い友情を日中の国家間の関係になぞらえ、日中関係を「千万年の後までも」続くものとし

辛亥革命成就から100年目の今年、宮崎兄弟と孫文には熱い視線が注がれている。この100年の間、日本と中国の間にはさまざまな問題が横たわり、視界をくもらせることがたびたびある。しかし中国で建国の父と慕われる孫文を、私欲なく献身的に支え続けた宮崎滔天の存在は、そのくもった視界を一掃するようないかなる力があるように思う。

滔天をはじめとする宮崎兄弟の思想には、宮崎家という家に由来する真つ直ぐな一本の筋が通っていた。その一本の筋に寄り添う「理想の社会の創造」という目標は兄弟に固く共有され、その先に兄弟の末弟・滔天と孫文の出会いがあった。